



三笑



特別
子12
3643
16(13)



三笑

^{シテサレ}晋^シの^エ惠^{ラシ}遠^クの^ス廣^ク山^ノの^{モト}中^ニに^{キヨ}居^シて^ニテ
^ヨ今^ノ年^ノ限^リ山^ヲを^イ出^スル^ニ白^ク蓮^ノ社^ヲを^モと^シテ
^オあ^リび^ニお^シ十八^ノの^ア質^{アリ}有^クを^ス外^ニ叔^ノ百^ノ人^ノ世^ヲ
^ロ生^クく^ニ榮^スを^モと^シき^くあ^リよ^ニ西^ノ方^ヲを^誦
^シした^ク字^ヲを^礼して^テ此^ノ榮^ノ庭^ノに^終止^スル^ニ
^カかく^テ流^ルき^をを^抑ぐ^ル出^ルに^足ら^ずと^思ひ^て



故
 梅若誠
 昭和元年十月三日
 梅重戸氏
 寄贈

三笑

上言
行任所仰れおきあひよく有禪乃
床をさるる月も西にさく折う反
洞煙谷雲乃うもよもし暴命れ航
乃白舟小月ほの山れまたとこ
たそあひきお雲を心にけくを
けく油をけく身をけくおやくに倦
て還ありともまららんや比も早

霜降川れ曙よく野山の草老
文もりもちお紅葉たうり乃
枯野をれとまら菊乃花はあき
る物もあけあしほよさゆるあき
つたけ草屋よ惠志禪師のま
るる陶剛陸脩静是とよ
了ん 具時禪師ハ白蓮社を

書を以て 洞明を拓きたれん 天
をたに拜とす 危山乃ありま
石橋を心志のふゆあり 巖より腰
をうき瀑布を流終つり 三千世衆ハ
眠る所き十二因縁心け中にまひり
女の情 いた惠を得師より今いひ公
行事にむいそ 梅意山よりつる所

石のまのまき僧にあつては山あり
空を右様より申候 梅と瀑布とを
ゆへにのり得乃有やと しかやく
こののりもあ 萬何名所なき瀑
布よりよ 日暮がさして 紫煙
をたぬ 清くはれぬ織うとくは
天台小掛 寶尺を疑かたをなめ

十三裁

法釋

三

ふきりりかた 然ちよ入馬力勝
裁一易以爲 噴く林梢に向
ひく夏電とあり 如くまきつ
てふた春雷をなひ 志しと歡す
是銀け乃水成りて 人向く雲
落しと 命と かくる 思
三國を双乃公胤 今と拜せぬ心

ふきりりかた 然ちよ入馬力勝
裁一易以爲 噴く林梢に向
ひく夏電とあり 如くまきつ
てふた春雷をなひ 志しと歡す
是銀け乃水成りて 人向く雲
落しと 命と かくる 思
三國を双乃公胤 今と拜せぬ心

仙の法を学んで陸道士をトと
後おのふ山乃前寂觀の隱居し
あゝゆるりげんて天下にそちぬ
わいものいさふ事乃序山は虎溪よ
くちろ無事ぬれりきり 菊乃志
露つりけりて不老不死の薬を

いけぞもつて 我萬代もかごら
志れありと益乃思れ夜もさく
生をきり白菊の花を脊にさす
や酒粒乃舞とや人のまじり
萬代をさく松の久しと倒ちり
松も久しとありあり年々を老
松も緑はわらわれば小松四季にそ

